生きるものと対峙し、その尊さを真摯に描き続けた童画家

井口　文秀（1909~1992）

井口文秀は、明治42年（1909）７月１日、下新川郡大家庄村（現朝日町）に、僧侶の父文岱と母ぬいの三男として生まれる。天性の画才は幼いときから現れ、小学生時代から、「美小路」という雅号で絵を描き、友人と絵・詩・歌・童話等を持ち寄って同人誌を作る。そして、高等小学校在学中に出会った西田彦衛先生のあたたかい指導を受け、絵の道に入ることを決意する。

昭和３年（1928）、19歳で、栄照山了見寺住職であった兄を頼って上京。兄の寺の寺役を務めながら、太平洋美術学校（旧太平洋画会研究所）で３年間、洋画の基礎を学ぶ。その後、児童図書の出版社から挿絵を依頼されたことがきっかけで、児童図書専門の挿絵童画家として歩み出すことになる。

戦時下で描かれた「軍用犬」は文秀が初めて手掛けた絵物語であるが、昭和20年（1945）、出版される前日に東京大空襲で倉庫もろとも焼失し、出版されずに終わる。同年、文秀は横須賀海兵団に入隊するが、間もなく終戦を迎える。戦後、文秀は挿絵の仕事を再開。多くの出版社の発行する絵本の原画を引き受け、その後、小学校や中学校の国語、音楽等の教科書の挿絵も手掛ける。「大造じいさんとガン」や「スーホーの白い馬」等、多くの人々が文秀の絵に出合っている。

子供向けの絵本や雑誌、教科書などの挿絵は、大正時代から子供を理想的な存在として描かれていた。しかし、昭和40年代に童画に大きな変革が訪れ、対象をあるがままに捉える絵作りが始まる。文秀も現物を見ること、現地の空気を肌で感じることを何より大切にして、精力的に制作を手掛ける。

昭和43年（1968）、児童文学者の松谷みよ子と共に故郷の朝日町を訪れ、「むささびのコロ」や「センナじいとくま」を制作する。以降、あるがままの現実の精粋に迫る独自のリアリズム表現の童画を描き始める。経済成長期には、サギが農薬で浮いた魚を食べて苦しみながら舞い、地上に落ちていくという悲しい現状を知り、たとえようもない憤りをもって、「しろいさぎしろいわた」と「しらさぎとあきひこ」を制作する。文秀は、かねてより野生動物と人間の関わりに深い興味を寄せていたが、自然破壊が深刻になりつつある社会を憂い、子供たちが未来に希望をもてる絵本にしたいと強く願うようになる。

昭和45年（1970）、単身で大白鳥のルーツを求めてシベリアの奥地へ向かう。この取材を通して作成されたのが、富山市栃谷の大沢池に飛来してきた白鳥と村人、子供たちとの愛の交流を描いた「コーリャよはばたけ」である。芸術性の高い、自身初の創作絵本の誕生であった。「人間と自然の調和した世界」を絵本によって描くことを追求し、「くろべのツンコぎつね」「ライチョウは生きる」等の作品の中には、文秀のふるさとへの思いが込められている。文秀の繊細にして深みのある画風は、欧米各国の人々にも認められ、27作品が出版された。

「本物を見ずして絵を描くことは、子どもに失礼だ」と現物を見ること、現地の空気を肌で感じることを絶対としていたという文秀が制作した絵本には、生きるものすべてに限りなく優しいまなざしを注ぐ人柄がにじみ出ている。平成４年（1992）に急逝。文秀のメッセージは、子供だけでなく現代に生きる人々にも多くのことを語りかけている。

＜専門員　飛騨　英樹＞

白鳥の取材（S52）
井口文秀「童画の世界」
（朝日町立ふるさと美術館）

コーリャよはばたけ
（井口文秀　画／文　童心社）